Ⅰ　『研究紀要』第 25 巻の刊行によせて

「自発的」とはどういうことか

教育研究所所長　佐伯　胖

最近読んだ本でいろいろ考えさせられたのは國分功一郎の『中動態の世界―意志と責任の考古学』(医学書院、2017 年)である。

私たちが学校で習う動詞の態(voice)は、能動態(active voice)と受動態(passive voice)の二種類である。前者は「スル」動詞、例えば「殴ル」であり、後者は「サレル」動詞、例えば「殴ラレル」である。しかし、たとえば「眠る」という動詞を考えると、「眠った状態」を能動的に引き起こすことはできないし、だからといって他人から「眠らされる」というのは、催眠術でもかけられないかぎり起こりえない。このような受動でもなく能動でもない動詞の態は「中動態」と言わねばならない。このように、「中動態」は日常的に経験しているにもかかわらず、それが「能動」でもなく「受動」でもない別の態(中動態)だということにはほとんど注意が向けられてこなかった。

國分が「中動態」の重要性を説く際に注目したのが行為の「自発性」である。能動的行為(スル行為)というのは行為者の「自発性」による行為、つまり自発的行為である。受動的行為(サレル行為)というのは非自発的行為(行為者の自発性にもとづかない行為)といってもいいだろう。そこで國分は、ハンナ・アレント(Hannah Arendt, 1906-1875)の提起した問題を紹介する。アレントが取り上げているのは、「銃で脅された人物が、自分の手でポケットからお金を出して、相手に渡す」という例である。この場合、銃で脅されていたとはいえ、「お金を出して相手に渡す」行為は、本人が「自分で行っている」のだから、自主的行為、すなわち能動態だというべきだろうか。確かに「お金を出して相手に渡す」行為だけを切り出せば、明らかには能動態であり、「自発的行為」と言わざるを得ないが、私たちの常識では、「これは自発的行為ではない」と言いたくなる。だからと言ってそれを完全に受動態の、他者によって(力づくで)サレる行為とは言えないだろう。ここで國分は「中動態」なる動詞の態の必要性を説くのだが、私にはこの問題が提起しているのは「お金を渡す行為」をどう分類するかという問題を越えて、そもそも「自発的行為」とは何かが問われているように思われる。

「銃で脅されたから」を理由に「自発的じゃない」というのなら、「じゃあ、銃じゃなければ何でもいいのか」となり、「声ですごまれた」とか、「猫なで声で誘われた」とかならどうなんだ、と問わざるを得ないだろう。「うまく誘いこまれて行う」のは自発的なのか。あるいは、「本人は全く気付いていないけど、うまく誘導されて行う」行為は？さらに、教室で問題を解くヒントやカギを示されて正解できるようになるのは？

こう考えると、中動態とされる行為のなかには、限りなく受動に近いものと、限りなく能動に近いものがあることがわかるだろう。そこでは「行為の自発性」をどう捉えるかが深く関わっている。そこに教育実践の原点があり、私たちは絶えず問い直していかねばならない。